

『バベルの塔』考察

Ⅱニューヨークから古代メソポタミアまでⅡ

千葉 紘

二〇〇五年一月二十日行われた米国大統領就任演説は、ケリー上院議員に三五〇万票以上の大差をつけて再選された結果の演説であったが、演説中に、*freedom* という言葉が二十五回以上使われた。*liberty* も *freedom* も日本語では「自由」となるが、*freedom* は本来、「何々からの解放」を示す自由であるから、その言葉が出てくる背景には、束縛するものが存在している。その演説の中に「米国人は、党派や環境を超えて、自由の大義のもとに互いに結ばれている。自由が攻撃にさらされた時、わが国の団結と友情を感じた。我々は、心をひとつにした」という一節がある。もちろんこれは、同時多発テロに対する米国の意思表示である。同じ単語を何度も繰り返すのは、実は一般に言うべき内容に自信がないとき、何とか客観的に力を与えようとして行うということを述べている人がいるが、なかなかの得ていると思われる。米国が自信をなくしている背景には、世界貿易センター・ツインタワーの崩壊という、ありうべからざる、誰も想像もしなかったことが現実起きたことにあることは間違いない。N・チョムスキーはテロ直後のインタビュで「ほとんどすべての犯罪には——路上の強盗であれ、大規模なテロであれ——理由がある」と語っている。エンパイア・ステートビルではなくぜツインタワーが標的となったのだろうか。チョムスキーはインタビュの中で「米国は世界における、最も過激な宗教的原理主義文化の一つなのだ。国ではなく、大衆文化が」とも語っている。ツインタワーはニューヨークというよりまさにアメリカ大衆の象徴だったが、そのツインタワーとは一体、どのような経緯で建てられたのだろうか、意外に知られていない。さらには、なぜあのような摩天楼を人間は建てようとするのだろうか、このようなことから考察を始めたい。

一 世界貿易センターの歴史

世界貿易センターについて、建築史的観点から述べたものにアンガス・ギレスピーの著作『世界貿易センタービル』がある。ここではこの著作をもとに世界貿易センターの歴史についてまとめてみたい。この本は二〇〇二年三月に刊行されているが、原著は九・一一テロ以前の一九九九年に書かれたもので、それにツインタワー崩壊後の写真をつけ加えて二〇〇二年に刊行された

翻訳である。ツインタワーは高さが三八一メートルのエンパイア・ステートビルを抜いて、四一一メートルという当時世界一の高さのビルディングだった。わずか二年後、四四二メートルの高さのシカゴのシアーズ・タワーに世界一の座を譲ることになるが、これらの高さの単位をフィートにすると、

エンパイア・ステートビル…一二五〇 ft

ツインタワー…一三五〇 ft

シアーズタワー…一四五〇 ft

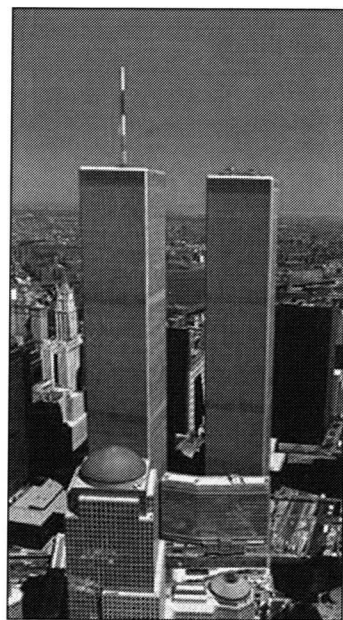
となり、一〇〇フィートずつ高くなっていることが分り興味深い。

本論に戻ろう。世界貿易センターという複合施設構想は、一九六〇年ごろ、ポートオーソリテイ・オブ・ニューヨーク・アンド・ニュージャージー

(Port Authority of New York and New Jersey) が反対論を押し切る形で表面化したものである。建築は、著名な建築家三人の提案をしりぞけ、シアトルにいた日系人ミノル・ヤマサキを起用した。反ツインタワー派の共通する部分にこのヤマサキが好きではないというものが大きい、というのは注目すべき点であろう。ギレスピーはこう書いている。「一口に言えば、ポートオーソリテイはニューヨーク気質を受け継いだ組織だった。ニューヨークでもない。ポートオーソリテイが受け継いだのは、人を押し

退けても前に進むとする野心に富んだ、移民たちのニューヨークだった」と。世界貿易センター構想の底流を流れる注目すべき思想・哲学と見えよう。

ポートオーソリテイの責任者の一人トゾーリはヤマサキにこう言う。「ヤマ。いまケネディ大統領は月に人を送ろうとしているんだ。君には世界で一番高いビルを作ってもらいたい」。そしてもう一人の責任者トービンが好んだ言葉は、「小さな計画は立てるな。小さな計画は人々の血を沸かすことはない」(ニューヨーク最初の高層ビル フラット・アイナン・ビルディングを建てた建築家ダニエル・バーンハムの言葉) だった。約十年後完成したツインタワーは、マンハッタンの景観の象徴、ニューヨーク市の象徴というよりは、



ありし日の世界貿易センター

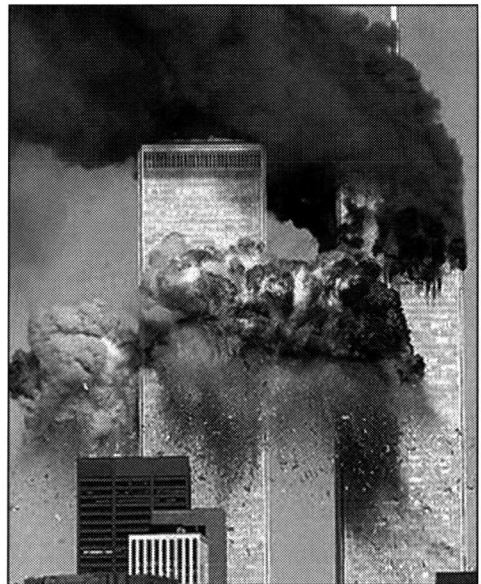


業績と力の象徴

アメリカの特殊性とアメリカ資本主義の象徴としてとらえられた。アメリカという国自体を象徴している可能性もある。GRESPIERは「世界貿易センター」という住所には、そのものに価値があるのではない。それは、業績と力の象徴なのである」と言う。この高層ビル・摩天楼こそ、建築界から無視されようと、評価を与えられまいとアメリカの豊かさの象徴あり、「よい暮らし」の象徴だったのである。装飾よりも機能を重視し、貴族的なものより土着的なものを取り入れてつくられたビルを、GRESPIERは「私たち清教徒的、開拓者的な立場からすると、飾り気のないミニマリズムの建物は心に訴える力がある。評論家がなんと言おうと、人々は世界貿易センターの大きさに惹かれている」とさえ書いている。高層ビルは歴史的にみると、ニューヨークとシカゴの高さを競いあう争いにより発達したアメリカが考え出したものである。摩天楼（スカイ・スクレイパー skyscraper）とは高層ビルを指す言葉だ。この言葉は建物が「空（スカイ）」を「霞める（スクレイプする）」という意味から来ている。空を霞める建物をつくり、富と自由の象徴と崇め、そこで蠢くことを夢とするのは、何もアメリカ人だけではない。なぜならば、二〇〇四年一月まで世界一の高さのビルは、皮肉なことに、イスラム圏であるマレーシアのクアラルンプールに聳え立っているペトロナス・ツインタワー^三だった。コンクリートを多用した構造、地域の建築文化を取り込んだデザインなどの点で、世界貿易センターとは対極に位置する非モダニズム建築であるにもかかわらず、その形状はツインタワーでもある。二〇〇一年九月一日、ニューヨークの摩天楼でも群を抜いて高い、アメリカの象徴ツインタワーが崩れ落ちる映像が繰り返し放映されるのを見たとき、何故、人間は天に



ペトロナス・ツインタワー



炎上するツインタワー

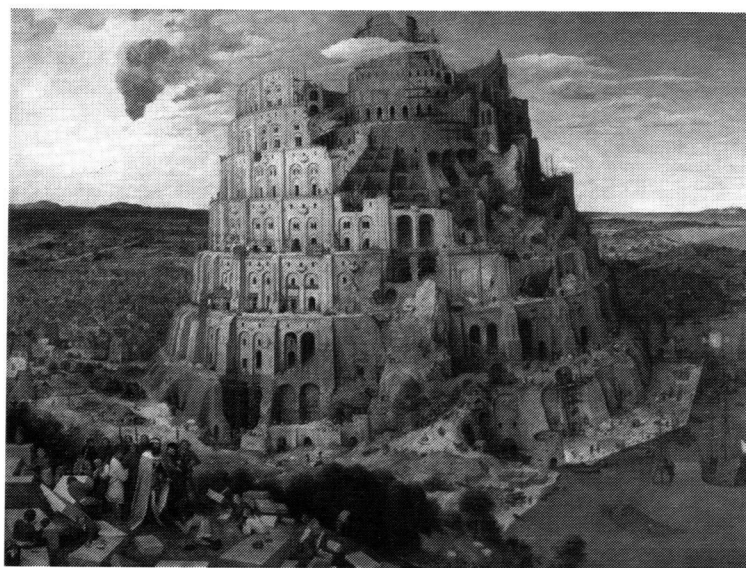
も届けと言わんばかりの、このような建物をつくったのだろうか、強烈に感じたことを今でも鮮明に思い出す。聳え立つタワー——塔——を人間はいつから何のためにつくり出したのだろうか。そう考えた瞬間、真つ先に脳裏に浮かぶのは、ピーテル・ブリューゲルの絵画による『バベルの塔』である。

二 P・ブリューゲルの『バベルの塔』——中野孝次の解釈——

『バベルの塔』は、旧約聖書「創世記」一一章ノアの洪水の後に次のように出てくる。

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、漆喰の代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。

こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。



『バベルの塔』P. ブリューゲル（ウィーン美術史美術館）

たったこれだけが旧約聖書にある『バベルの塔』に関する部分である。天才的画家P・プリューゲルはどのようにその鋭い感性で捕らえ、解釈し、作品にしたのだろうか。図像解釈学的に考察してみる。この部分は、若桑みどり、中野孝次、両氏の著作をもとに話を展開したい。その後、『バベルの塔』の物語が実話なのか否か、考古学的観点から考察していきたい。

その前に、中野孝次氏が用いている文語訳聖書では次のようになっていいることを紹介しておく。

全地は一の言葉一の音のみなりき。茲に人衆東に移りてシナルの地に平野を得て其処に居住り。彼等互に言けるは去来
 甌石を作り之を善く焼かんと。遂に石の代に甌石を獲、灰沙の代に石漆を獲たり。又曰ひけるは去来邑と塔とを建て其塔の
 頂を天にいたらしめん。斯して我等名を揚て全地の表面に散ることを免れんと。エホバ降臨りて彼人衆の建る邑と塔とを觀
 たまへり。エホバ言たまひけるは視よ、民は一にして皆一の言語を用ふ。今既に此を為し始めたり。然ば凡て其為んと圖維
 る事は禁止め得られざるべし。去来我等降り彼処にて彼等の言語を淆し互に言語を通ずることを得ざらしめんと。エホバ遂
 に彼等を彼処より全地の表面に散らしたまひければ彼等邑を建ることを罷たり。是故に其名はバベル（淆乱）と呼ばる。是
 はエホバ彼処に全地の言語を淆したまひしに由てなり。彼処よりエホバ彼等を全地の表に散らしたまへり。

ウィーン美術史美術館の作品が主としてプリューゲルの作品として知られているが、その描かれている執拗とさえ言える克明さにはただただ驚かされる。プリューゲルは建造中の塔のいたるところに、実際に一六世紀にネーデルラントで使用されていたもろもろの建造用の機械を、詳細正確に描写している。さらに石を削り、運び、煉瓦を焼き、トンネルやクレーン、船、馬などを用いて蟻のように無数の人間たちが働いているのが分る。ただ克明さに相反して、プリューゲルが何を語ろうとしているのか分らない。

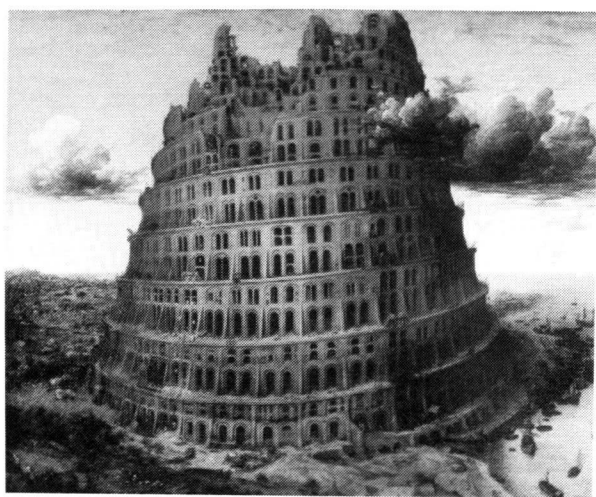
この作品について中野孝次氏はこう語る。

（細部の驚くべき緻密さ正確さに感心するのをやめ、また退いて絵を全体として眺めようとすると）絵はまたもとのひどく奇怪な、ほとんどデモニッシュなものに戻ってしまう。なにか魔的なものがそこにある。技術と労働力を駆使して天にまでとどく建造物をつくろうという意志が魔的なのか、それともこの平穏な低地地方に突出した異様な岩塊が魔的なのかわからないが、いかにもそれは都市の平穏な存在に対比してグロテスクで不調和だ。そして見る者に印象づけられるのは、結局その最後の印象だけである。

これを読んで、崩壊したツインタワーに通じるものがあると感じるのは、私だけではないだろう。科学技術文明が世界に行き渡ることを進歩とする一種の信仰が、社会的政治的体制の相違を超えて信じられてきた。工業化、都市化、技術化されないことを「未開」、「野蛮」としてきた。近代化以前である。だから手をさしのべねばならぬ。そんな論理が世界中に流布されてきた。したがって高度工業化された国家を「先進国」と呼び、地球を二十回も破滅させる核を蔵した国家が強国となる。なにかが根本のところまで狂ったまま、地球を覆う途方もない規模の運動になってしまったかのようだ、という内容の氏の文章は説得力がある。ロッテルダム美術館にあるブリュッゲルのもう一つの『バベルの塔』はほぼ完成に近ずいて聳え立つ塔が、すでに暗鬱な雲につつまれている段階を示している。低くさがった地平に赤黒い不吉な色に染まった塔だけが聳え、手前の丘陵ももはや取払われ、地上も塔も何やらの襲来を待つかのようにいつそう暗い色彩に覆われている。これはまさに崩壊する科学技術文明の予言のような不吉な絵ではないかと中野氏は解釈している。ただ十六世紀に描かれた二つの作品とも、ブリュッゲルが結局のところ何を伝えようとしているのか分らない、というのが氏の眩き・結論である。それでは、美術史的な解釈はどのようなものであろうか。美術史家若桑みどり氏の解釈を紹介する。

三 P・ブリュッゲルの『バベルの塔』―若桑みどりの解釈―

創世記に出てくる煉瓦の塔とは、二世紀に『ユダヤ古代誌』を書いたフラウィウス・ヨセフスユダヤによると、実際に煉瓦で建造されていたメソポタミアのシュメル人の巨大な建造物「ジクラート」であったとされている（これについては後で詳しく述べる）。若桑氏は次のように言う。



『バベルの塔』P・ブリュッゲル（ロッテルダム美術館）

ブリュッゲルは、彼がイタリア旅行の折に実際に見たローマのコロセウムをモデルにしている。印象ばかりではなく、彼は一五五〇年と六一年に、ヒエロニムス・コックが出版したローマの廃墟の眺望集を参照した。そのため建築的、構造的細部は驚くほどの現実感があり、実在の廃墟である古代ローマ帝国の巨大建造物をモデルにしたことにも、また、これが砂漠のなかではなく、アントウエルペンの港のありさまを暗示していることにも、より同時代的な意味がこめられているのではないかと考えられる。

聖書の物語は、通常、神の住まいである天にまで届く建造物を建てようとした、人間の神を恐れぬ傲慢^{ヒエプリスム}への刑罰であり、傲慢の悪徳をいましめるための教訓として理解され、表現されてきた。若桑氏はブリュッゲル研究の第一人者ウォルター・ギブソンの解釈として、こう紹介している。この当時、ブリュッゲルが住み、モデルとした港アントウエルペンは多言語の辞書の発行がさかんにおこなわれた国際的文化都市であり、ブリュッゲルの保護者で啓蒙的な出版業者ブランティンは、一五六六年に、ヘブライ語やカルデア語を含む六か国語の聖書を発行する計画をたてていた。ギブソンは、ブリュッゲルが、宗教改革によって世界の宗教が分裂し、争いと不和がもつとも激烈をきわめた一六世紀半ばにおいて、人々の言語あるいは宗教が分裂することを嘆き、人々が共通の信仰に心を合わせること願ったのではないかと解釈していると。だが、若桑氏はこう書いている。

ブリュッゲルは、自分の時代の精神的状況をこの挿話によって象徴もしくは風刺しようとしたことは間違いないだろう。

だが、その執拗なまでに科学的、工学的な建造場面の精密な細部はなにを意味するのであろうか。さきに述べたように、高い視点から見られたこの画面は一見していかにも壮大な風景画に見えるが、細部を見ると、微細な労働者が蟻のようにはいつくばるミニチュールである。この壮大な構図は、細部に視点を移したときに、まったくことなつた様相を見せてくるのである。いわば労働者の視線、蟻の視線になつたときに、人類のこの壮大な工事は、貧しいものたちにとつてのいつくせない労苦、はてのない苦痛にすぎないことがわかる。建造物の高さ、巨大さがまさればまざるほど、人間の姿は相対的に卑小にマメ粒のように無力になる。ブリュッゲルはここで働いている人間たちのどの人物にも、誇らしげな英雄や、傲慢のしぐさを与えていない。ここで働く蟻のような人間や馬は、みなそろいもそろつてありふれた農民風の労働者ばかりである。

ただひとり総監督のニムロデとその家臣たちは威張っているが、その前にはさながら命ごいをしているように、ニムロデにひざまずいている石工がいる。その他の仲間には彼のために王に詫びている様子である。前景に起こっているこのエピソードは、ここに働いている労働者の一般的状态が、不幸なものであることを作者が注釈しているのである。

ここで言われているニムロデというのは、塔の建設の監督者で、紀元前二千年頃の伝説的なバビロニアの征服者である。ブリュエルは、画面前景に工事現場を視察するニムロデの一行を描いているのである。この絵では、はるかな丘のむこうには空と海がひろがっている。塔の項きには雲がかかっているが、その高さを強調しているが、空の高さははるかにその塔をしのいでいる。永遠のひろがりをもつ空と大地のもので、この塔に働く人間たちの卑小さが浮かび上がる。栄華を誇ったローマの競技場は廃墟と化し、ローマに象徴されるローマ・カソリック教会も危機に瀕している。いっぽう、この当時のフランドルはスペイン王家の支配下であり、ニムロデ王に屈服する石工のように人々はその王権に従っていた。愚かな権力の誇示のために労働するあわれな人間たち、その無益な事業をブリュエルはすべて愚行として描いたのではないだろうか。若桑氏は述べている。また、ブリュエル自身の宗教的信条がどのようなものであったにせよ、彼はこの主題によって、人間のスケールを無視した巨大建造物に象徴された巨大権力の危険を暗示したのである。この名画の意味するものは、今日いっそう切実なまた普遍的な警告として生きていると言う。ただ、ブリュエル研究の第一人者ウォルター・ギブソンも日本におけるブリュエル研究者、森洋子氏も、この主題によって彼がなにを語ろうとしたかははっきりしていないと言っている。中野孝次氏の文学的観点から、若桑みどり氏の美術史的観点から、双方ともブリュエルが伝えたかったことが何なのか、何となくはつきりしないという共通の結論に至るのである。そうすると、必然的に再度、あの「創世記」に書かれていることを史的観点から、さらにはタワー「塔」についての思想的観点からの分析の必要性が生じてくる。

四 『バベルの塔』——犬養道子の解釈——

犬養道子氏はカトリック信者というスタンスを感じさせない客観的観点から、聖書についての多くの著作がある。氏が旧約における『バベルの塔』を物語として、さらに聖書学的にどのように解釈されているかを紹介したい。著作の中で物語として犬養氏は次のように捉えている。

地上に住む人々はみな、同じ言語を用いていた。「ただひとつの唇」だったわけである。そして、ひとつの唇は、団結を意味し、政治や文化の結合をも意味していた。

セムの子孫すなわちセム族が、東の方から移動して黄土のセソナル平地にしっかりと住みついたころのこと。彼らは丈高い巨人たちであった。姿のごとく、彼らは「超人」に、内面においてもなりたいたいものと願った。何者よりすぐれ、何者をも必要と

せず、万物一切を支配する超人に。

「われらの勢力を高々とかけ、われらの誇りをあたりに示そう。天までもとどく塔をつくらう」と、彼ら平地の人々は語り合うようになった。「われらの名こそ、天地の中で、最も強い名、美しい名。この名を全地に示す町をつくり上げ、その中央に塔を建てよう。この世は、われらだけでこと足りる」

煉瓦がよいと人々は考えた。石を使って建物をつくり、河のほとりの沖積土の黄色い粘土をこねて町をつくる、そう言うありきたりの建造物はいやだった。人々は煉瓦を焼き、営々と町を築きはじめた。

主である神は、天の高みからそれを眺めた。

「ひとつの唇で、ひとつに団結して、ひとつの町を建てている」と、神は思った。「すべては思いのままになると思いこんでいる。あそこにひとつに固まって、満すべき地の表を満すことなく、安住しようと考えている。乱そう、彼らの唇を。四散して地の表を満して行くように。」

天地の間でおのれほど強く美しい者はないと、傲りたかぶる心に酔って、主であるわたしを忘れ去る民を、散りぢりに乱そう」ある日突然、町を築く人々は、互いの言語の通じなくなっているのに驚いた。唇はもはやひとつではなかった。無数の唇が、無数の言語を語りはじめていた。それと同時に心も通い合わなくなった。どうやって、互いに互いを理解させることが出来るだろうか。

人々は、自分と「同じ唇」の者同士集まって、やがて四方に散って行った。驚きと恐れに満され途方にくれつつ。

塔も町も中途はんばでこのされた。

「乱れた門」または「多くの神々」とその町が呼ばれたのはまさにうってつけであった……自己至上・自己陶醉の傲りは、人間社会の一致を破り、通じあうべき心を乱し、多くの派閥によって世を分裂させるから。

後世の人々は、この挿話を、年代がもつと下った新バビロニア王朝時代の、バビロン（バベルと同じ語から出た名）の、ジグラドの塔にからむ挿話と考えている。その塔のあったころ、イスラエルの民たちの中のおびただしい人数はバビロンの地に住んでいた。その地で民族の古い文書を編するうち、目のあたりに見る塔の挿話を、ノアの物語のあとに書き加えたと推定される。彼らが見たのは、ネブカドネザル大王が復興再建した塔であり、その復興の塔のそもその原型は、洪水直後のウルの附近に建てられていた「七つの階の神殿」であった。

今日、パリのルーヴルの博物館の古代の部屋に行く人は高さ九十メートルを優に越えていたこの「バベルの塔」について記された、楔形文字の記録板を見ることが出来るだろう。民々は増え、「唇を乱されて」四方はるかに散って行った。そしてある日――

テラの子アブラムが、神に召されたのだった。

人間の傲り・傲慢に対する因果論的「物語」ということでは、『バベルの塔』をめぐる一般的解釈と違いはない。一般的解釈として、例えば、敬虔なプロテスタントであった作家三浦綾子氏も次のように書いている。^三

このバベルの町をつくろうとした人々は、神の域に迫ろうとしたのだ。人間でありながら、人間の領分を越え、神の領分に踏みこもうとしたのだ。自分を神と等しい高さに置こうとしたのだ。これが、人間の常に陥りやすい傲慢であり、すでに陥っている傲慢なのだ。

犬養氏同様、傲慢に対する報いと解釈している。さらに三浦氏は小説家らしく、「わたしたちは、神の座を侵そうとして、逆に建てかけた塔と町を置いて、ちりぢりに散って行くバベルの人々の惨めな姿を笑うことができぬ自分自身を、今、もう一度、立ちどまって見つめたいものである」とも書かれている。この人間の傲慢に対する因果論については後で戻る。

犬養氏は、聖書の本質に迫るライフワークシリーズ第一巻^三の中で『バベルの塔』について「おはなし」としながら、次のように言う。

「ひろがり住むのはやめよう」。「そして神に達する（神となる）塔を建てて、われら自身の名を高めよう」という文のころは、神はいらない、われわれだけでこと足りる、さあ、団結して塔をつくろう、われわれは天までも入ってすなわち宇宙を支配して、神々となる。われわれの名は至上となる。マルクスやレーニンなどがずつとのちになって口にした理論と同じこと。『労働階級よ、団結せよ、人間は人間だけで十分なのだ、われわれが生の謎も死の謎もひつくるめて一切への答を持っているのだから、さあ、われわれの名（無神論共産主義）を唯一至高のものとしよう……」。

自分で自分の「名を高めよう」ときめたとき、ひとつだった言語はバベル（ごちゃごちゃ）になって互いは理解しえなくなつた……。

言語学上の言語というより、同一の言語を使っても、意志は通じなくなり、相互いをわかることが出来なくなった。何というリアリズム！ ひとつの家庭の中で、同じ日本語を使いながらも、ひとりひとりが「わたしこそ」と思いあがるとき、夫と

妻は、親と子は、姑と嫁は、「わかってくれない、わかる気にもならない」よそよそしい他人になってしまふのである。分裂の「ごちゃごちゃ」はしのびこむ。日常の体験がそのことを語ってくれるではないか。

そして、結びとして、新しい人類史の具体的発足が、「おはなし」ではなく歴史的出来ごととして、新約聖書中の使徒言行録二章四節に書かれているとする。神のことばに全身全心あげてしたがう、イエスの弟子たちは神の息吹きを受けて満たされる。そのとき、異邦異国の言語をも「語れる者たち」となった。すなわち、互いにわかりあえる和合の人々となって遠いかなたへもひろがってゆける者となった。バベルのとき塔づくりの人々が拒否したひろがり、新たに出来たと説明する。キリスト教的・宗教的解釈である。キリスト教信者にとって、この結論は一つの真実である。しかし、私にとってもう少し事実を追求した文献がほしかった。他の文献を紹介しよう。

五 『バベルの塔』——石田友雄の解釈——

イスラエル史が専門の石田友雄氏は著書の中で、そもそも、二千年も三千年も昔に、古代オリエントという、現代の日本とはまったく違う文化圏で生活していた人々の言葉が、わたしたちに「わかりやすい」はずがない。しかし、翻訳聖書を読んでいると、字面はすらすら読めるので、現代の日本人である自分と、聖書が語る人々の間に、時間的・空間的に大きなギャップがあることをつい忘れてしまう。その結果、読めるけれど「わからない」ということになるのである、と重要な指摘をしている。その上で、「バベルの塔物語は、たぶん、バビロニアに実在した高い塔（ズイクラト）の廃墟を見て、インスピレーションを受けた人々が、なぜその塔が廃墟になっているのか、その理由を説明しようとした物語であろう。すなわち、かつてバビロニア人は、国家権力によって国民を統一し、自分たちの支配下に世界の諸民族を統合しようとする覇権主義の象徴として、この高い塔の建設に着手した。しかし、その不遜な計画をヤハウエが邪魔したので完成することができなかった、というのである。もしこの説明をバビロニア人が聞いたら、もちろん、そのような解釈はとんでもない誤解であり曲解である、と反論したにちがいない」と書かれている。さらに「バベルの塔物語は、客観的な事実とは無関係に、天に届く塔（ズイクラト）の建設について、一方的な評価を下した文書である。神々を天界から地上に迎えるために建てられた塔は、天界に昇ろうとする人間の野心の象徴にされた。同様に都市名『バベル』は、『神々の門』ではなく、『混乱』（バラル）を意味すると説明された」と言う。そして、「（エデンの園・失楽園物語）と『バベルの塔』という二つの物語の共通点は、神々のようになろうとした人間、あるいは神々の住まいで

ある天に到達しようとした人間に対して、ヤハウェが行動を起こしてそれを阻止したことである。その際に、ヤハウェが「わたしたち」と複数形で語ることにも共通している。天界の王ヤハウェが、天使や天の怪獣に命じているのだと言う。そしてイザヤ書二章二節～五節を引用して「本当の平和は、各自が心中に抱く覇権主義的イデオロギーを否定して、全人類の共通語を求めることができるかどうかにかかっている、とイザヤは考えていたのである」と言われる。そのイザヤ書にはこう書かれている。

終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい、多くの民が来て言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。

ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

ユダのバビロン捕囚が紀元前二千五百年、イザヤ書は紀元前八世紀のものである。犬養道子氏の使徒言行録への関連付けと同様、キリスト教信者には「真実」かもしれないが、「事実」としては私には納得しかねる。事実を超えて真実が存在するという観念は十二分に承知しているが。

六 『バベルの塔』——M・バルテルの解釈——

M・バルテルはバベルの塔は、一つの比喩であって事実ではないと次のように断言している。^{一八}

バベルの塔の建設の話は、歴史ではなくて、一つの物語である。考古学者たちよりも、文学史家たちにとって興味のある物語である。(中略)従って、この話は、一種の「因果論」である。つまり、現実や、一般的に知られている事実が、比喩として利用されている一つの物語である。

神が人間の言葉を混乱させることによって、人間を罰すると彼は言う。さらに続けてこう言う。

言葉の混乱や、全地への離散にもめげずに、人類は「今から彼らにとって不可能なことはなくなるだろう」（創世記二・六）という聖書の言葉を、何とかして実際に証明してみようと努力しつづけた。そのためには、「統一語」が必要だった。技術者たちはそれを発見した。「数字と公式」という言葉である。彼らは今、それを使って天に通じる現代の塔を建てつつある。宇宙ロケットの発射であり、水素爆弾であり、中性子爆弾である。このような技術的な偉業——これが、現代のバベルの塔ではないだろうか？「わたしたちはすでにこのことを始めた。これから先、何事も不可能ではない。」（創世記二・六）そのとおりだ。全滅さえも可能だ。バベルの塔の建設は今、進行中である、——世界の至るところで。しかし、警告のために立てられた人指し指のように、『バベルの塔』は、あらゆる時代を通じて人類を見下ろしている。それは、旧約聖書の創造神話をしめくくる道徳的な感嘆符である。

また、アンドレ・パロに言及して「アンドレ・パロは、センチメートル単位で、正確に測った。床面積は、九一平方メートル（正方形）、七つの階段の長さは、合計九一・五メートル、一九〇でも、九一でもなく、きっちり九一・五メートルだった。さすがは考古学者である。しかし、わたしたちは、このような正確な数字に氣をとられて、本質的な点を見落とさないようにしなければならぬ。塔だけを見ていると、えてして本来の意味を見失う」とまで言っている。果してM・バルテルの述べていることが本来の意味だろうか、私にはそうは思えない。なぜならアンドレ・パロは本質を見失うことなど決してしていないからである。

七 『バベルの塔』——アンドレ・パロの解釈——

バベルの塔に関して、考古学者アンドレ・パロはこの物語が第五節で終わっていれば、何の問題もなかったと言う。つまり、「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、『れんがを作り、それをよく焼こう』と話し合った。石の代わりにれんがを、漆喰の代わりにアスファルトを用いた。彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、」

までは、何ら問題はなかったというのである。それが実際には、神ヤハウェが干渉に出てきて、このばかげた建造物に呪いをくだす。ひとびとはまき散らされその事業を断念する。かれらの企画の舞台であった町はバベルと称せられた。というのは、そのヤハウェは人間の言葉を混乱させ、そこからかれらをまき散らしたからである。本文を翻訳によってのみ読むひとは、解釈が

ひじょうにむつかしいことはわからないであろうとパロは言う。確かにその通りである。また、この物語は聖書を通じて一度しか記されていないし、また旧約および新約聖書の人物の一人としてこの物語にふれているものがまったくないということを鋭く指摘している。イザヤ書も使徒言行録でも『バベルの塔』についてはふれていないのである。一般に、解釈者は「創世記」第一章の物語のなかに真実の歴史よりもむしろ倫理を発見することを求めているとパロは言う。非常に鋭い指摘である。そして考古学者として次のように語る。

新バビロン王朝の創始者ナボポラッサル（紀元前六二五―六〇五年）は、かれがバビロンに復興した塔についてくわしくつぎのように述べている。「主、マルドゥクはバビロンの階層のある塔、エテメンアンキについてわたくしに命じた。この塔はわたくしの生まれるまえに損傷荒廃していたので、その基礎を地下深くかため、その頂上を天にとかせよというのであった」（「エテメンアンキ」については後であれる）。

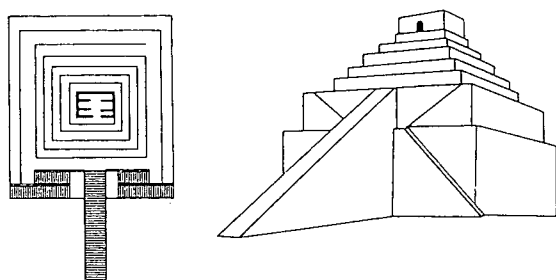
そして、一九一三年に発掘された粘土板に塔（ジクラート）の大きさが次のように記載されている。

第一階	縦九〇m	横九〇m	高さ三三m
第二階	縦七八m	横七八m	高さ一八m
第七階	縦二四m	横二二m	高さ一五m

となる。高さは九〇mにおよぶ。こうした地道な考古学的研究によって『バベルの塔』が物語でもなく、「おはなし」でもなく、メソポタミアのあちこちに存在したジクラート―塔の一つであることが実証され、復元図が作られ、『バベルの塔』が姿を現したのである。「創世記」一章の物語のなかに、真実の歴史よりもむしろ倫理を発見することを求めていると言うパロがM・バルテルが言うように本質を見落としているだろうか。本質を見落としているのはM・バルテルの方ではないだろうかと思はれる。

パロは言う。『バベルの塔』の聖書の物語は、きわめて「歴史的」であると。

となると、『バベルの塔』について、誰がいつ旧約聖書（これはキリスト教的言い方でユダ



パロによる「バベルの塔」復元図

やでは聖書Ⅱ旧約聖書であつたが)に書いたのか、もう一度仕切り直しをして調べなくてはいけない。

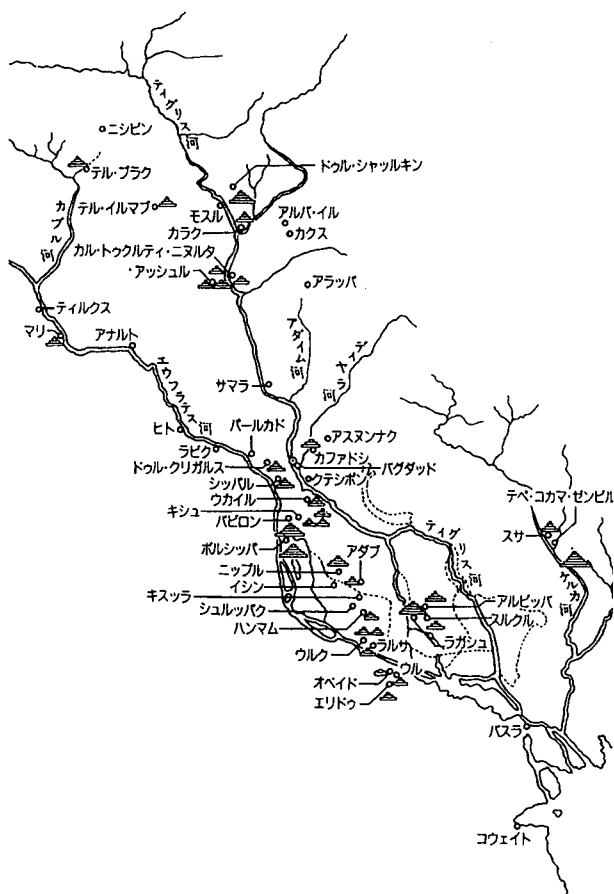
仕切り直す前に、パロが言う重要なことに注意しなくてはならない。彼はこう語っている。

論争を逸らせてはならない。『バベルの塔』は、そういうことはしばしばあるが、教義的な立場に従つて判断されるべきでなく、記念物の光に照らして、またただそれだけで判断されるべきである。

すなわち、

イスラエルは、異教主義と圧制の永遠のシンボルであるバベルについて、嘆か

ざるをえなかつたのである。それはもつともなことである。人間の傲慢ははなはだしく、その虚栄は限りないことをすすんで認めるのである。専制君主たちは―それはかつてのかれらばかりでなく、今日もなお同じである―その偉業、その手のわざを誇示する長い碑文を好む。それはすべて真実であり、あくまで真実である。同様に、もしシネアルの平原のひとびとが、かれらの塔を建造するときに、戦争をいどむために天に梯子をかけようとする意図をもっていたとするならば、かれらの罪は明らかであろう。それは重大な罪であろう。しかしかれらはたしかにそのような意図をもたなかった。天に、すなわちかれらの神々に接近しようとしたというのでかれらを批難することができるであろうか？ 問題はこれである。もしそうであるとすれば、われわれは論理的にならう。すなわちすべて人間の企図は、ノートル・ダームの塔は、シャルトルの大聖堂の尖塔は、同じように非難しなければならぬであらう！



メソポタミアのジグラー分布図

しかも、「そのとき一つであり、したがって平和であった人間の心にあらゆる争いまたあらゆる憎しみの源である不和を」手ずから投じたこの怒りの神は、まじめに考えねばならない重大な問題を提出していることをわれわれは認めるであらう！

われわれは、ここでもう一度、「創世記」——一章に戻って既成觀念なしで調べる必要がある。その前に、フラウイウス・ヨセフスは著書『ユダヤ古代誌』の中で『バベルの塔』についてどのように書いているだろうかを調べてみたい。

八 『バベルの塔』——フラウイウス・ヨセフスは語る——

『ユダヤ古代誌』に書かれている『バベルの塔』について少し長くなるが全文をあげてみる。

神にたいしこのような思ひ上がった侮辱的な行為に出るよう彼らを扇動したのは、ノアの子ハムの孫で、強壯な体力を誇る鉄面皮人のニムロデだった。彼は人々を説得して、彼らの繁栄が神のおかげではなく、彼ら自身の剛勇によることを納得させた。そして神への畏れから人間を解き放す唯一の方法は、たえず彼らを彼自身の力に頼らせることであると考え、しだいに事態を専制的な方向へもつていった。彼はまた、もし神が再び地を洪水で覆うつもりなら、そのときには神に復讐してやると言った。水が達しないような高い塔を建てて、父祖たちの滅亡の復讐をするというのである。

人びとは、神にしたがうことは奴隷になることだと考えて、ニムロデの勧告を熱心に実行し、疲れも忘れて塔の建設に懸命に取り組んだ。そして、人海戦術のおかげで、予想よりもはるかに早く塔はそびえたつことになった。しかもそれは非常に厚く頑丈にできていたので、むしろ高さが貧弱に見えるほどだった。素材は焼き煉瓦で、水で流されないようにアスファルトで固められていた。ところで、神は狂気の沙汰の彼らを見ても、今度は彼らを抹殺しようとは考えられなかった。最初の洪水の犠牲者たちを破滅に導いても、その体験が子孫たちに知恵を授けることにならなかったからである。

しかし神は、彼らにいろいろ異なった言葉をしゃべらせることによって彼らを混乱におとし入れた。言葉が多様になったため、互いの意志が通じなくなってしまったのである。

なお彼らが塔を建てた場所は、かつてはすべての人が理解できた人間の最初の言葉に混乱が生じたので、現在バビロンと呼ばれている。というのも、ヘブル人は混乱のことをバベルと呼んでいるからである。

この塔の話と人間の言葉の混乱に関する話は、次のシビュラの言葉にも記載されている。

すべての人間が共通の言葉で話していた時代に、そびえたつ高い塔を建てようとした人びとがいた。それによって天まで登ろうとしたのである。しかし神々は、風を吹きつけてその塔を倒し、人びとには各自それぞれ異なる言語をお与えになった。そこでその都市はバビロンと呼ばれるようになった。

なお、バビロン地方のシナルと呼ばれる平原について、ヘステイアイオスは次のように語っている。

さて洪水から助かった祭司たちは、バビロンのシナルへやって来た。エヌユアリオス・ゼウスの聖なる什器を携えて、バビロンのシナルへやって来た。

さて、それ以後、人びとは言葉の多様化のために、分散せざるを得なくなり、各地に植民地をつくった。それぞれの集団が、たまたま発見した土地や、神に導かれて発見した場所を占領したため、どの大陸も、内陸部といわず沿岸部といわず、いたる所が人であふれるようになった。

なかには舟に乗って海を渡り、島々に居住する者もあらわれた。ところで、民族の中には、その創建者によって与えられた名を今なお保持しているものもあるが、それを変更したり、近隣の人たちに分かりやすくするためにいくらか修正を加えたりしているものもある。

このような呼称の変更にもっとも責任を感じなければならぬのは、ギリシア人である。

というのは、彼らは後に勢力をもつようになると、他民族の過去の栄光を自分たちのものにしようと、自分たちに理解できる呼称で他民族の名を修飾したり、他民族が自分たちの子孫であるかのように、自分たち流儀の統治形態を押しつけてしまったからである。

フラウウィウス・ヨセフスは『ユダヤ古代誌』を、ユダヤ民族の歴史は「連綿と」「途絶えることなく」続いてきているという観点を重視して書いている。したがって、『バベルの塔』についても同様のことが言えて、『バベルの塔』について、誰がいつ聖書（この場合は、当然旧約聖書）に書いたのかという問題に対する答えは得られない。古代メソポタミアの一つの神話として言及していると思われる。

九 『バベルの塔』——長谷川三千子の警告——

『バベルの塔』は誰がいつ聖書に書いたのかについて幅広い視点から論じたのが、長谷川三千子氏の著作『バベルの謎』^{二三}である。氏が慎みをもって「門外漢」と自らを称しているが、であるがゆえに、「創世記」——一章に戻って既成觀念なしで調べているこの著作には学ぶものが多い。

P・ブリューゲルは、「まるで地殻の底からふき出た奇怪なできもの」と言える作品を描いて、『バベルの塔』を表現した。そして、この物語は小さな挿話であり、ふつう、人間が高慢、不遜にも天までとどく塔を建てようとして神に罰せられ、言葉を乱され、多言語、多民族へと分かれることになったという物語とされている。これが「おなじみの物語」である。

この「おなじみの物語」はあまりにもしつかりと人々の心に刻みつけられているので、誰も、敢えてこの物語を読む必要をおぼえないと長谷川氏は言う。しかし、あらためて読み直すと、そこにあの「おなじみの物語」が少しも見あたらないのに気付いて愕然とさせられると指摘する。そこにあるのは、矛盾し、混乱した不可解な記述のむれであると長谷川氏は言う。今一度、『創世記』——一章一節から九節までの全文を引いてみる。

全地は一つことば、一つの用語であつた。人々が東から移つて来てシナルの地に平野を見出し、そこに居を定めた。そして互に言つた。さあ、煉瓦を作つて、固く焼こう、と。かくて彼らは煉瓦を石の代りに、^{ビトウメン}瀝青を漆喰の代りに用いた。そこで彼らは言つた。さあわれわれは、われわれのために町と塔とを建て、その頂きを天に届かせよう。そしてわれわれが全地の面に散らされぬよう、われわれに名を作ろう、と。ヤハウエは下つて町と人の子らの建てた塔を見た。見よ、彼らは一つ民でみなが一つことばである。これを彼らはなし始めたのだ。これから彼らが企ててあたわぬことはなくなろう。さあ、我らは下つてかして彼らのことばを乱し、誰も互いのことばが解らぬようにしよう、と。こうしてヤハウエは彼らをそこから全地の面に散らし、彼らは町を建てることをやめた。それゆえそれはバベルと呼ばれる。ヤハウエがそこで全地のことばを乱し、ヤハウエがそこから人々を全地の面に散らしたからである。^{二四}

長谷川氏はこの全文を読んで、あれほど重要な中心的要素であつた「人間の傲慢、不遜のしるしとしての塔」というものが、ここにはほとんど見当たらないということを指摘する。たしかに、人間たちは「頂きが天にとどく塔」を建てようとしていて、

それを「高慢のしるし」と思うというのが「常識」であるとしてきた。しかし本文のどこにも「人間の高慢」については言及していない。わずかに「われわれに名をつくらう」という表現が高慢さをほのめかしているようであるが、これは旧約聖書の他の箇所でもよく使われる言い回しだという。塔の建設が人間の功名心や野心のあらわれだと強調するが、「われわれが全地の面に散らされぬよう」という一節を忘れてはならないと長谷川氏は言う。人々がここで願っていたのは、ただその地にしっかりと根をおろし、息災に暮らしたいという慎ましい願いですらある。それを野心のあらわれだというのは、全く筋が通らないと鋭く指摘する。それでも、神にとって塔の建設が高慢に見えたのだろうか。しかし、表立ってあらわれた表現としては、ひとことも神はそれを咎めてはいないことに気が付く（「塔」を建てる—この「塔」とは何かについては後で触れる）。

「見よ、彼らは一つ民でみなが一つことばである。これを彼らはなし始めたのだ」の部分を「彼らは一つ民で、皆一つ言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ」と意訳して、あくまで神が塔の建設を見咎めていると解釈するのはあまりに苦しいとする。なぜなら、「見よ」と言っておいて、そこで直ちに見咎めた当の事柄を語らないというのは、この文章のスタイルから考えてあまりにも不自然だと長谷川氏は断言する。虚心坦懐にここを読めば、どう見ても、神は人々の「一つ民、一つことば」であるという事態を見咎め、憂慮していると解釈する。ここで私が常に気になっていたことが一気に表面化してくる。つまり「人間の高慢、不遜のしるしとしての塔」などというものが見当たらないという事実が。「人間の高慢、不遜のしるしとしての塔」が抜き去られてしまったら、この物語は一体、何を言おうとしているのか、立ち往生してしまう。「全体的に見てもさっぱり分からないものは、ポイントを絞って見ていくことで分かってくる」と言われる。これから、先入観を捨てて書かれていることから分析していきたい。

十 『バベルの塔』—再読する 『バベルの謎』を引きながら—

「彼らは町を建てることをやめた」とあるが、塔については言及されていない。塔の崩壊も、建設の挫折も何も書かれていない。この物語そのものが塔に関して未完であり、「未完の『未完の塔』の物語」とは長谷川氏は言う。したがって、「塔の物語」として読むことは不可能である。では、「塔の物語」でなければ、これは一体何の物語なのであろうか。そこで考えられるのは、「一つ民、一つことば」が塔の建設の背後にあって、それが罪とされたのではないかということになる。だからこそ、神は「我ら下ってかしこで彼らのことばを乱し、誰も互いのことばがわからぬようにしよう」と決断したのではないかと思われる。

説得力がある解釈のように見えるが、これも次の瞬間大きな矛盾に突き当たってしまう。すなわち、それならば冒頭の「全地は一つことば、一つの用語であった」はどう解釈したらいいのかという疑問が湧いてくるのである。「全地は一つことば、一つの用語であった」は、アダム以来の神の十全なる祝福のうちにある状態だったはずである。これを神が見咎めるという矛盾はどう解釈したらいいのか。しかも「これを彼らはなし始めたのだ」と言う。元来、一つことばだったのではないのか。となると、『バベルの塔』の物語は、「塔の物語」として読むことができないだけではなく、「言葉の物語」して読むこともできないという、まさに袋小路に立ってしまふことになる。前にも述べたように、この袋小路は聖書を「聖なる書」としている人々には生じえない。だが袋小路に立ちすくむ人間には、一体この物語は誰が書き、聖書のなかでどのような位置にあるのかということまで掘り下げる必要がある。

十一 『バベルの塔』―「旧約聖書」での位置づけ―

『バベルの塔』は旧約聖書「創世記」の中に書かれていることは再三述べてきたが、この「創世記」は旧約聖書の「律法」(モーセ五書)の中に分類される。「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」を「律法」という。「律法」の中で「創世記」一章から一一章までを「原初史(Urgeschichte)」と言ふ、この部分は他と比べてみてまったく異質な記述になっている。「イスラエルの民」が出てこないのである。『バベルの塔』はこの「原初史」に類別される。旧約学の研究で「原初史」の書き手が、紀元前九〇〇年代の南王国ユダの人物らしいことが分かっている。しかも旧約学の大家ゲルハルト・フォン・ラートは、作者は一人だろうとみなしている。長谷川氏はその書き手をヤハウイストと呼んでいる。このヤハウイストが「原初史」を構想し、「律法」の基本をつくり、それがユダヤ教のベースをつくったのである。ヤハウイストは当時の状況から、とうていヘブライ語しか解さない人間だったとは考えられない。彼もまた、多かれ少なかれ、こうした地域特有の「多言語人間」であつたらうと思われる。とすれば、その彼が、「異なる諸言語の存在」という事実に出会って素朴に驚き怪しみ、それを「神罰」―天まで届く塔を建てようなどと不遜なことを考えた罰―として説明しようとした、ということとは考えにくい。彼はむしろ、すでに慣れっこになり、あたり前の事実となつていた「異なる諸言語の存在」という事実を、いわば哲学的な目で「再発見」したのでない。そして、それによって、この事実のうちにひそむ「構造」を見抜いたに違いないのであると長谷川氏は説明する。ひとことで言えば、人間の言語は「地」に縛られているのだということ―これが、ヤハウイストの見抜いた、「諸言語の存在」のうちにひそむ「構造」だったのである。すでに見たとおり、従来の多くの解説者たちの語ってきたような素朴な説明は、ここで

は何の役にも立ってくれない。彼らはこれを、人間が高慢にも天まで届く塔を建てようと企てたので、神がこれを罰して言葉を乱し、諸言語を発生させた、という話なのだと説明し、かくして「塔」の主題と「言葉」の主題とが「罪と罰」として組み合わせられているのだと解釈する。しかし、ヤハウイストが直面していたのは、いま見たとおり、そんな「かんたんな話」で片の付くような問題ではなかったと長谷川氏は指摘する。言えることは、ヤハウイストが「塔」に出会わなければ、「言葉」についての問題は起きなかっただろうということである。それではこれまで何ら触れなかったこの「塔」とは一体何だろうか。パロラ聖書考古学者が発掘し、復元したように「塔」は実在した建造物である。「バベルの塔」とヤハウイストについてはまた戻ることにして、「塔」について少し詳しく考察してみたい。

十二 「塔」とは何か―アレクサンダー女史の研究から―

これまで「塔」(ジクラート、ズイクラト等)という言葉は何度も使ってきたが、その特徴については詳しく考えなかった。パロラ考古学者が復元した図を眺めた程度であった。「その頂きが天までとどく塔」と言われると、アントウエルペンの教会塔などが自然に浮かんでくるだろうとアレクサンダー女史は言う。

しかし、それはまったくの間違いで復元図からも分かるようにジクラートは外形がピラミッドに似ている。しかし、両者の根本的違いを次のように明確に説明している。

ピラミッドはその下にあるものを覆い、守護する。それは、どんなに高く積み上げられていても、明らかに下方をめざすものであり、上方を指向するものではない。

われわれがピラミッドをジクラートと比較するなら、後者は観念的、宗教的意図において、また芸術的意図において、前者とは完全に異なったものであり、したがって、その美学的な効果もまったく別なものである



アントウエルペンの教会塔
(14～16世紀建設)

に相違ないということがあきらかになる。(中略)ピラミッドの硬直した崇高さにとくらべるとき、何と対照的なことであろう。ジグラートは断固として、上方へ、天へむかっている。

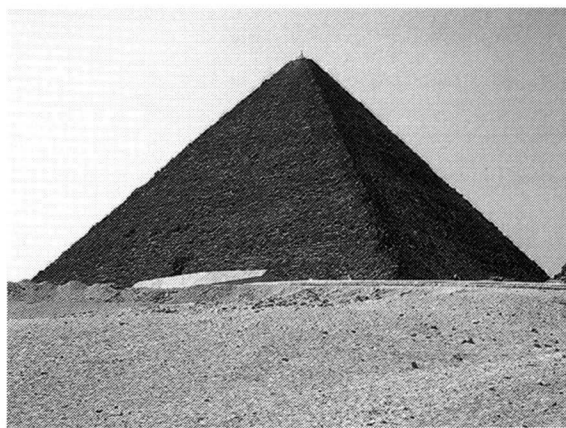
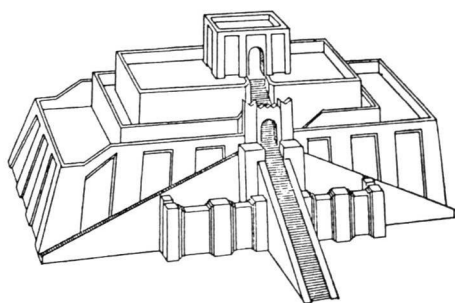
さらに彼女はこう語る。

塔はいわば、首尾一貫した運動の、つまり唯一の垂直方向へのうごきのにない手であり、けっして止むことのない高所への展開のひとこまなのであり、象徴的に表現され、芸術的に実現された垂直上昇の理念の純粋な具体化なのである。

ピラミッドは巨大な墳墓なのであり、幾何学的に構築された山以外の何物でもない。それはジグラートのような象徴としての山ではない。その使命は、いわばまったく現実的なものである。内部に神格化された王の遺体と宝物をかくし、それらを外界から守り、永久に保存する、奥ふかく、しばしば地中にかくれた墓室の上につき重ねられる巨大な量塊、ピラミッドはその下にあるものをおおい、守護する。それは、たとえどんなに高く積み上げられていても、あきらかに下方をめざすものであり、上方を指向するものではない。その芸術的な目標、その本質的な特徴は最高度の平静、不動、不変にある。

歴史的事実とその考察から、『ベルの塔』こそ――つまり歴史的に証明されたバビロニアのマルデューク神殿こそ――原則的に、塔と考えてよい最古の建造物だと断定できると彼女は言う。その名前を「エ・テメン・アン・キ」ということがメソポタミアの創世神話『エヌマ・エリッシュ』に記されている。

横道にそれるが、彼女が、アメリカは塔を必要と



ジグラート復元図の一つ(上)とピラミッドの一つ(下)

しなかったからそれを建てなかった。アメリカは凌駕したいという自己の欲求を芸術的なしかたで解決し、表現する必要がなかった、と言っているのは非常に興味深い。(近年は必要があるとも言える)

アレクサンダー女史による指摘で、ジクラートは上方への動きであり、一方、ピラミッドは下方への動きであることを学ぶことができた。

この予備知識をもとにして、いよいよ最終段階に入る前に、これまでの論点の整理と若干の補足しておく。

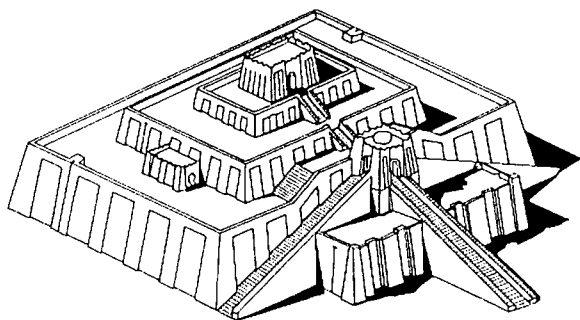
十三 『バベルの塔』——これまでの論点整理と補足——

全地は一つことば、一つの用語であった。人々が東から移って来てシナルの地に平野を見出し、そこに居を定めた。そして互に言った。さあ、煉瓦を作って、固く焼こう、と。かくて彼らは煉瓦を石の代りに、^{ビドゥメン}瀝青を漆喰の代りに用いた。そこで彼らは言った。さあわれわれは、われわれのために町と塔とを建て、その頂きを天に届かせよう。そしてわれわれが全地の面に散らされぬよう、われわれに名を作ろう、と。

ヤハウエは下って町と人の子らの建てた塔を見た。見よ、彼らは一つ民でみなが一つことばである。これを彼らはなし始めたのだ。これから彼らが企ててあたわぬことはなくなろう。さあ、我らは下ってかして彼らのことばを乱し、誰も互いのことばが解らぬようにしよう、と。こうしてヤハウエは彼らをそこから全地の面に散らし、彼らは町を建てることをやめた。それゆえそれはバベルと呼ばれる。ヤハウエがそこで全地のことばを乱し、ヤハウエがそこから人々を全地の面に散らしたからである。

① この物語は「おはなし」でも空想の「物語」でもなく、(雛型が) 実在したことが現在判明している。キリスト教信者が「ヨハネ黙示録」等で、憎むべき野望に満ちたバビロンと信じる一方で、パロらの発掘調査で、バビロンの王は信心深く献身的に神に奉仕し、その象徴としてジクラートをつくったことが分かっている。

② 「全地は一つ民、一つことばであった」こう始まれば九節とはうまく対応するが、その場合、二節と全く呼応しなくなる。



ウルのジクラート

- ③ ここで言う「塔」とはジクラートと呼ばれるもので、古代メソポタミアの多くの場所で発掘されている。バビロンのジクラートにつけられた「エ・テメン・アン・キ」とは、アッカド語で「天と地の礎の家」という意味である。
- ④ この物語を、「人間の傲慢、不遜のしるしとしての塔」が崩壊される物語として（従来どおり）読む根拠が、物語のどこにも書かれていない。
- ⑤ 「塔」——ジクラート——はピラミッドと外見は似ているが、ジクラートはあくまで上方を目指し、ピラミッドは下方を目指すという点で根本的に異なる性質のものである。
- ⑥ この物語が「塔」をつくることが主題なのか、一つことはという「言葉」が主題なのか言い尽くされていない。つまり作者ヤハウィストは何を言いたかったのか分らない。敬虔な気持ちでジクラートを上方に向かって建てている様子を丹念に描写していたのが、突然豹変したような書き方に狼狽してしまう。
- ⑦ 九節「それゆえそれはバベルと呼ばれる。ヤハウエがそこで全地のことを乱し、ヤハウエがそこから人々を全地の面に散らしたからである」については、ヘブライ語の「乱す」という言葉の音を「バベル」の名前にかけて、町の由来を示すような語源譚の形をとっているが、出来が悪い語呂合わせというものが、研究者ではいまでは常識になっている。ただし、出来が悪いことを「バベル」の本来の意味を十分承知の上で、作者ヤハウィストは書いている。「バベル」は本来「偉大な神の家々」という意味で、これを敢えて屈辱的なヘブライ語「乱す」に強引に関連付けている。
- ⑧ この物語は「旧約聖書」の「創世記」の一章ノアの洪水の後に後に出てくるが、一つ一貫していることは、ヤハウエ神が「人」と「地」との結託つまり「人」を「土」から作って以来、彼と「人」との関係は、つねに「土」（「地」）に脅かされている。神経をとがらせて見張っているという表現を長谷川氏は用いている。

十四 『バベルの塔』——最終考察の前に——

これまで述べたように、「人間の傲慢、不遜のしるしとしての塔」が崩壊される物語と読む根拠が、実際にはどこにも書かれていない。ただ、神が何かを突然見咎めて、憤りこの物語の様相がガラリと変わっていることは確かである。となると、長谷川氏が鋭く指摘しているように、神が「人」と「地」との結託を、「ジクラートの本質」をあらわすものとして語られた「われわれが全地の面に散らされぬよう」という自分たちの台詞のうちに、「人」が「地」にしがみつき、「地」に結びつくさまを見て、憤ったと解釈するのがきわめて自然である。バビロンのジクラート「エ・テメン・アン・キ」という名は、アッカド語で「天と

地の礎の家」という意味であるということも分かっている。ヤハウィストが肌身で感じていたバビロニア語という「ことば」の世界と、そこで彼が見たジクラートという建造物が、「地」に根を下ろしているという意味でぴたりと重なったのである。ただこれはバビロンのことだけではなく、自分たちにも関わる非常に危険な洞察であることに気がつく。自分たちは「偶像崇拜の禁止」という或る意味で、「地」と結びつくことを戒めている。「ことば」という非物質的な道を通つてのみ、神と人間の関係は構築されるべきであると教えてきている。しかるに、実はその「ことば」なるものが、「カナーンの地」に根ざし、ほとんど「カナーンの地」が産んだと言つてもよい「カナーンの国ことば」であつた——この発見は、それだけですぐにヤハウィストを打ちのめすに充分な発見だつたであろう、と長谷川氏は言う。彼女はさらに続けて言う。

しかも、ことはそれだけにとどまらない。もしもそのことを嫌つて、「カナーンの国ことば」ならぬことばで神のことを記し、神に祈ろうとしても、この世にありとあらゆることばは、すべて必ず、どこかの「国ことば」なのである。せっかく「偶像崇拜」を禁止して、「ことば」という非物質的な領域に自らの宗教を築こうとしても、実はその「ことば」自体が、「非物質的」どころか、至るところで、つねに必ず、「地の産物」そのものである。この手のほどこしようなない基本事実を前にして、ヤハウィストはやり場のない憤りと絶望にうちのめされたに違いない。「地」に根付いてはならないという教えに、完全に反することになる。ジクラートの持つ本質の一部である「地とのつながり」を隠さなければならない。ジクラートという建造物の下半分について、描写を故意に省き、それを「塔」と呼んで、シュメール起源の「ジクラート」という言葉を一切つかっていないのもそれ故である。

十五 『バベルの塔』——最終考察——

この物語の後、「創世記」はどう展開していくのだろうか、聖書「創世記」一二章を第一節から三節まで引用する。

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが表示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」^{二六}

アブラムにこの地を離れて、神に祝福された地に行けと言っている。そこに定住したら、また神は「全地の面に散らす」のであろうか。長谷川氏はそういうことが文章から見てとれるというが、門外漢の私には判断できない。ただその後、数百年後、ユダヤ民族はここに書かれたような歴史を辿っていく。長谷川氏は最後にこう言う。

これをもって、ヤハウィストがユダヤ民族の運命を予見し、予言したと言うのは正確な言い方ではあるまい。ヤハウィストは、彼の原初史の挫折とによって、いわばユダヤ民族の運命の形を造形したのである。

「神に祝福された地」に行ったらもう散らさないとということかも知れない。ただ、この物語を、「人間の傲慢、不遜のしるしとしての塔」が崩壊される物語と読む根拠がないことだけは言えるのではなからうか。『バベルの塔』はほかしながらも、アブラム（アブラム）につなげるためには是非とも挿入しなければならない物語だった。

世界貿易センター・ツインタワーから古代メソポタミアのジクラートまで「塔」について、専門外の人間が論じてきた。この物語は、キリスト教信者の方なら、真実として、人間への戒めとして、ごく自然に疑問なく理解している「創世記」の中の短な一挿話に過ぎない。私のこだわり過ぎかも知れない。だが、私の目に浮かぶ『バベルの塔』のイメージは、中野孝次氏が言うP・ブリューゲルの作品が「まるで地殻の底からふき出た奇怪なできもの」であることは確かである。

十六 参考

「聖書の決定版というものは、歴史上一度も存在しない」と話題作『ダ・ヴィンチ・コード』でダン・ブラウンは述べている。参考として、カトリック信者の方々がよく読まれるドン・ボスコ社のバルバロ訳旧約聖書『バベルの塔』部分およびその解説と注釈の一部と、新欽定訳聖書、現代英語訳聖書の該当部分をあげておく。

さて、全地はおなじ言語とおなじことばをつかっていた。人間は、東のほうから移動して、センナアルの地の平原につき、そこに定住した。かれらは、「さあ、れんがをつくり、火でやこう！」といい合った。かれらは、石のかわりにれんがを、しっくいのかわりにチャンを使いだした。つぎにかれらは、「さあ、町をつくり、その頂が天にまでとどく塔をつくらう。

全地のおもてに分かれないうに、われわれの名を高くあげよう！」といった。しかし主は、人間の子らがつくろうとしている町と塔とをみようとして下り、「なるほど、かれらはみな一つのことばだけを話す団結した国民で、その大事業をはじめたばかりだ。どんな計画も、完成できないはずはない、とかれらは思いこんでいる！さあ、われわれは、かれらのことばを乱しに行こう、そうすれば、お互にことばが通じなくなるだろう！」とおおせられ、主は、かれらをそこから全地のおもてに散らされたので、かれらは町をたてるのをやめた。バベルと呼ばれたのは、そのために、そこで主が全地のことばを乱し、かれらを全地のおもてに散らされたためである。

ドン・ボスコ社版旧約聖書解説・注釈

バベルの塔のエピソードは、歴史上、宗教上の重大な教訓として聖書にのせてあるために、厳密な年代記が問題となっていない。しかし、前後からみれば、このできごとは、全人類が当時分れたというよりも、むしろ、人類の一部分、正確に言えば、アブラハムの先祖たちが属していたあの一部分だけのことである。じじつ、一〇章二五節に、ヘレグの時代に「地は分れた」という注意をいれてのち、聖書記者は、こんどはその物語を長くのべる。したがって、本文の「全地」（一、九節）とか、全人類の意味に解釈された、複数形の「人間」（二節）とかは、問題になつてゐるその「全地方」と、その「グループの「すべての人々」と解釈したほうが妥当であり、すでに分散したものである他の民族（一〇・二―二三）は、記者の視野外になつてゐる。

このエピソードは、言語の混乱の歴史的な説明にもならない。以前にわかれひろがつた諸民族は、すでに「それぞれのことば」（二〇・五、一一〇、三二）によつても区別されているからである。

建築の目的は、政治的、文化的結合を確保すると同時に、「名を高くあげる」ことにある。すなわち、神を無視する超人としての自分たちの偉大さを示そうとする高慢な目的（傍点 千葉）。これこそ、神の干渉（一一・五―九）をまねく。しかし同じ神は、つぎにアブラハムにあらわれて、「その名を高くしよう」（一二・二）と約束して、すべてのまことの偉大さは、神への忠実な服従にあると強調する。この根本思想をあらわすために、聖書記者は、アブラハム以前に有名だったが、アブラハム当時すでに破滅された古代一強国のできごとを、簡略にのべるだけでじゅうぶんだった。これとちがつて、神が他日、アブラハムの一子孫をつうじて立てようとする王国―カトリック教会―は、決して破滅することはないだろう（マテオ一六・一八）。

新築民語圖 (二二二)

Now the whole earth had one language and one speech. And it came to pass, as they journeyed from the east, that they found a plain in the land of Shinar, and they dwelt there.

Then they said to one another, "Come, let us make bricks and bake them thoroughly." They had brick for stone, and they had asphalt for mortar.

And they said, "Come, let us build ourselves a city, and a tower whose top is in the heavens; let us make a name for ourselves, lest we be scattered abroad over the face of the whole earth."

But the Lord came down to see the city and the tower which the sons of men had built.

And the Lord said, "Indeed the people are one and they all have one language, and this is what they begin to do; now nothing that they propose to do will be withheld from them.

"Come, let Us go down and there confuse their language, that they may not understand one another's speech."

So the Lord scattered them abroad from there over the face of all the earth, and they ceased building the city.

Therefore its name is called Babel, because there the Lord confused the language of all the earth; and from there the Lord scattered them abroad over the face of all the earth.

民語圖 (一三三)

At first, the people of the whole world had only one language and used the same words.

As they wandered about in the East, they came to a plain in Babylonia and settled there.

They said to one another, "Come on! Let's make bricks and bake them hard." So they had bricks to build with and tar to hold them together.

They said, "Now let's build a city with a tower that reaches the sky, so that we can make a name for ourselves and not be scattered all over the earth."

Then the Lord came down to see the city and the tower which they had built, and he said, "Now then, these are all one people and they speak

one language; this is just the beginning of what they are going to do. Soon they will be able to do anything they want! Let us go down and mix up their language so that they will not understand each other.”
So the Lord scattered them all over the earth, and they stopped building the city.

The city was called Babylon, because there the Lord mixed up the language of all the people, and from there he scattered them all over the earth.

- 一【九・一二】(ノーム・チョムスキー 文藝春秋)
- 二【世界貿易センタービル】(アングス・K・ギレスピー KKベストセラーズ)
- 三二〇〇四年十二月二日 熊谷組施工「台北101」が世界一になった(五〇八メートル)。
- 四【新共同訳】による。
- 五【絵画を読む】(若桑みどり NHK出版会)
- 六【ブリュッゲルへの旅】(中野孝次 文春文庫)
- 七【創世記】(第二章一節―九節)
- 八 フラウィウス・ヨセフス 三七―一〇〇年頃。ユダヤの歴史家。対ローマのユダヤ戦争に、ユダヤの指揮官として参戦する。敗戦後にローマ帝国市民権を付与され、フラウィウス家の名前を称することまで許され、「あらゆる歴史書にまざる聖書」につぐ歴史書、いわば「プロテスタントの人びとの第五福音書」とさえ言われる【ユダヤ古代誌】【ユダヤ戦記】を著す。なおフラウィウス・ヨセフスについては【紀要第一号】参照。

九 Habris

- 一〇 お茶の水女子大学卒。ミューンヘン大学留学。プリンマー・カレッジ大学院修士課程卒(米国)。一九八八年、長年のブリュッゲル研究によりベルギー国王より王冠勲章シュヴァリエ章。二〇〇一年、紫綬褒章。現在、明治大学教授。
- 一一【旧約聖書物語】(犬養道子 新潮社)
- 一二【旧約聖書入門】(三浦綾子 知恵の森文庫)
- 一三【聖書を旅するI】(犬養道子 中央公論社)
- 一四【新約聖書】(新共同訳使徒言行録二章四節)「すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」
- 一五【聖書を読みとく】(石田友雄 草思社)
- 一六 イザヤ 紀元前八世紀の予言者。イザヤ書全六六章のうち、一一三九章を第一イザヤ書、四〇―五五章を第二イザヤ書(紀元前六世紀の預言者)、五六

章—六六章までを第三イザヤ書という。

一七 マンスフィールド・バルテル ドイツ生、哲学博士。

一八 『聖書をこう読む〈旧約〉』(M・バルテル 講談社)

一九 アンドレ・パロ Andre Parrot フランスの考古学者。一九三三年マリの発掘で多くの成果をあげた。

二〇 『聖書の考古学』(アンドレ・パロ みすず書房)

二一 『ユダヤ古代誌』(フラウイウス・ヨセフス ちくま学芸文庫)

二二 『バベルの謎』(長谷川三千子 中央公論社)

二三 瀝青…天然に得られる炭化水素化合物の総称。天然アスファルト・コールタール・石油アスファルト・ピッチなど。

二四 『バベルの謎』で用いている「創世記」二二章——九節部分を、新仮名遣いに直した。

二五 『塔の思想』(マグダ・R・アレクサンダー 河出書房新社)

二六 『新共同訳』

二七 『旧約・新約聖書』(ドン・ボスコ社)

二八 『欽定訳聖書』は英訳聖書の決定的なもので、一七世紀初頭、第一六代シオン修道会総長ロバート・フラッドを中心につくられた。シオン修道会は英訳にあたって、多くの暗号を聖書の中に盛り込んだことが知られている。アメリカのキリスト教徒が最も多く読んでいる聖書。